

意見陳述書

2016年10月26日
菅野みずえ

福島県浜通り浪江町津島地区に住んでいました。自宅は原発から27km地点にあり今も帰還困難区域です。自宅から少し高台に登ると、真っ直ぐに原発が見えていました。今年64歳になりましたが、このような人生が待っているなどとは思いません、これまで生きてきました。

震災当日は、原発から4kmしか離れて居ない勤務先の大熊町で地震に遭いました。私は福祉機関（包括支援センター）の職員をしていました。地震の後、道路では信号が停電のため事故が起こっている、駅の陸橋が落ちて渡れないなど次々と情報が入りました。揺れがおさまったのち、包括支援センターの利用者を連れて外へ出ましたが、地割れが起きているような状況でした。揺れが来る度に屋根から瓦が流れ落ち、通る車を直撃していました。3月11日は、雷が鳴り吹雪になり、それでも建物の中へは入れず、揺れの合間に職員が皆の上着を取りに入る状況でした。独居の方の安否確認に出る者、停電と寸断された情報網で町へ確認に出る者、そんな状況でしたので4km先にある原発のことを案じる余裕などありませんでした。東電からは、いかなる災害にも耐えうる備えがあると2月に説明を聞いたばかりでした。東電は大企業ですから、安全の上にも安全の措置がされている、万が一の事態にも備えがあると、信じていました。

地震後はガソリンを入れ、買い物をし、次の1週間に備えるつもりでした。しかしATMは動かず、ガソリンスタンドは安全装置が働いている上に、停電で給油が出来ませんでした。道路は渋滞し、普段は45分の道を3時間半もかけて、まるでパニック映画の中に居るような気持ちで帰宅しました。その時から一度も会えない職場の同僚もいます。

翌日からわたし達の地域は避難受け入れ地区となり、住民が500人の地域にピーク時には1万2000人もの方が避難していました。其処に向かって原発から放出された放射能を含んだ濃いプルームが流れていることなど知らないままでした。我が家への避難者もいましたが、12日の夕方、それまで見たことの無い防毒マスクと防護服を着た異様な男たちに「どうしてこんな所に居るんだ！此処は危ない！頼む逃げてください！福島方面へ30kmを越えてより遠くへ逃げてください」と泣くように懇願する指示の後に、半信半疑でしたが、避難者の方には逃げてもらいました。

屋内退避の連絡が来た時の恐ろしさをお分かり頂けるでしょうか。「外は危険

です、外に出ないでください。窓は締め、換気扇は止めてください。換気扇を新聞紙などで目張りして外気が入らないようにしてください。換気が出来ない
ので石油ストーブは消してください。車で避難している人はエアコンを切っ
てください」、という指示がありました。まだ風は山からの「やませ」の時期で、
海から吹く時期ではないはずでした。東電はいかなる災害にもたえうるといっ
たじゃないの！どうして？ と怒りとも恐怖とも言い難い気持ちでした。

あの金気臭い味、肌が乾燥し、鉄板の焼けるような匂い、その空気に触れて
いるところは粉をふいたように白くなりました。肌が異様に乾き、他の人も同
様で笑うと唇が裂け、血を流してホラー映画だべと互いの顔を見ながら笑っ
ていました。今は、それが原発からのプルームによるものだったと思うと、居場
所の無い被害に恐怖を覚えます。今になってもあの時の不安定な気持ちがフラ
ッシュバックして動けなくなる時があります。

原発の立地する町の友人たちは、すでに原発より遠くへと避難していたので
すが、原発の隣町のわたしの住む浪江町は、国や東京電力はおろか、県からさ
えも爆発の事実を知らされることも、避難の命令も出ないまま3月15日まで
30km圏内に留まっていたのです。

原発事故のために避難する、ということがどんなことなのか想像してみてく
ださい。どうやって生きて行くのか、何処に住んだらよいか分らない不安な
気持ち。そういう不安と5年を超えてなお向かい合っているのです。避難先で
は、何処に何があるか分らない町の仮住まい。何処にどんな医療機関があるの
かさえ分らない、ちょっとしたものの買い物は何処に行けばいいのか、日常
生活のちょっとしたことが、何もかも手探りでした。そして、避難先が変わ
る度に一からやり直しです。昨年、県外避難するまで自宅を出てから6回避難先
を転々としました。みんな、ばらばらです。自分たちの祭りもありません。四
季折々の地域の集まりも失くしました。何より、全てを話さなくても分りあ
える地域のつながりを無くしました。些細なことも共有できる人々と突然切り離
されてしまった虚ろさ、当たり前を全て失いました。今のわたし達だけ
でなく、これまでのご先祖の営々とした努力、費やした時間までなかった事に
してしまいました。

同じ言葉で話す人が居ない寂しさをお分かり頂けるでしょうか。当たり前の
日常が突然なくなるということ。避難とは、避難した者にしか分らない、と
ても辛い暮らしです。

原発は田舎にあると決まっています。きっと事故があると想定内なのでしょ
う。田舎の人間の命は都会の人の命より価値は低いと思われているのではない
か。わたしは被災して嫌と言うほど身に沁みて思っています。この辛さを経験
するのは、土地から切り離されたら生きるのが困難な田舎の人々です。

こったら苦勞を誰にもさせたくない。わたし達だけで沢山だと思った頃、子どもたちの甲状腺ガンが次々見つかりました。ローラー作戦で、総ざらいしたはずなのにそれから後も見つかり今174人の子がガンと診断されています。わたしも甲状腺癌の手術を受けました。昨年福島で受けた時に異常はなかったのに、県外に避難して今年避難検診を受けて甲状腺癌と診断され、直ぐに手術が必要とのことで摘出をしました。リンパ節にも転移していました。子どもにも原発事故との因果関係を認めないのですから、わたしも歳のせいということになりました。でも、本当に1年でリンパ節転移する癌になるのかと疑っています。避難する時に3時間並んだスクリーニングで上限の10万CPMの針が振り切れたのです。我が家の犬は一年を待たずに突然血を吐き、血尿血便で三日を頑張り抜いて死にました。動物たちへの影響も無かったのでしょうか。

裁判長、わたしがこの裁判の原告になろうと決めたのは、今黙っては何かあった時、わたしも加害者になると思ったからです。知らぬふりは出来ません。東電の話とは違い、原発は危ないものでした。事故を起こした福島の原発は運転から間もなく40年を迎えようとしていました。事故の原因も操業年数とのかかわりも何も解明されていないのに、40年を超えて原発を動かそうとするとは、なんてことでしょう。だから原告になりました。わたし達の苦勞を無かった事にしないでください。誰かに同じ苦勞をさせないでください。どうかお願いします。

以 上